

環境と行為 (その1)

— 技術と「間」 —

直江清隆

序

「今日、われわれすべては歴史とその運命の地平の中で存在し思考するが、もはや自然的世界の環境の中には生きていない。…われわれには、人間よりも古くそして恒常不変である一つの世界というものがなくなってしまった。(傍点原著者)」⁽¹⁾ カール・レーヴィットは世界概念を扱った1960年の論文の中でこう述べている。彼がここで「世界」と呼んでいるのはギリシャ的な意味での生きた秩序ある宇宙、つまり隠されたロゴスがそこで探究されうるような自然的コスモスのことである。言う迄もなく、レーヴィットのこうした^{コスモロジー}宇宙論的主張は、そこに人間が住まわった日常的世界である「環境世界」を手がかりに「世界性の世界性」に対して存在論的分析を行った師ハイデッガーに対する批判を込めたものである。彼はさらに次のように主張する。「ハイデッガーの『存在と時間』以降、〈世界-内-存在〉としての現存在については多様な議論がなされたが、この現存在の世界は秩序あるコスモスではなく、われわれの身近かがかつ広汎な共同世界、環境世界であり、それは関心をもち憂慮する人間に取崩されている限りでのみ、なお一種の秩序をもつにすぎないのである。In-der-Welt-seinという語における三個の連字符には、世界を自然から存在するものの一にして独立の存在として明瞭化させる力はないし、またするべきでもない。なぜならば、その連字符の意図するところは、まさに人間にとって〈自然な〉世界を現存在各自の実存的〈構造契機〉として示そうとすることにあるからである。」⁽²⁾

すでに明らかであろうが、レーヴィットの発言は実在論的色彩を色濃く滲ませたものである。それはまた——とくに転回以降のアレテイアやピュシスに対するハイデッガーの見解や1960年という批判の時期を顧みるならば——ハイデッガーに対する解釈や批判としても必ずしもフェアなものとはいえない。だが、そうした点を一旦括弧に入れて一つの問題提起としてみるならば、彼の発言から「世界」に対する幾つかの興味深い論点を読み取ることができよう。われわれはまずこの点を以下の手引きとすることにした。

即ち、その第一はハイデッガーでは環境世界内で出会われる存在者が「道具的」存在者とされ

たことに対する批判である。つまり、道具的存在者は「配慮的気遣い」において「手もと」にあるものとして出会われるわけだが、それは「のためにum--zu」という性格を有している。それ故、それらの適所性の連関は「究極目的Worumwillen」として「現存在」に至ることになる。しかし、レーヴィットに言わせるならば、こうした「ために」という性格は高々われわれに関わりを持つ限りでの世界現象に過ぎず、中心に人間が位置している以上、そうした道具の使用の中から「自然」を見出すことなど元来できない相談なのである。つまり、ハイデッガーは世界と人間との截断を最も徹底的に批判した論者でありながら、存在を現存在にもとづいて問うという基礎的存在論の方法において既にデカルト - アウグスティヌスの伝統に復している、というわけである。

第二に、その裏返しとして、こうした道具的世界に対して自然的世界が「それ自体」という性格を持つことが強調される。これはハイデッガー批判であるとともに、自体的なものとしての自然が「欠如的」規定にすぎないとした彼自身のかつての立場³⁾に対する自己批判でもある。

そして、第三に、この世界概念が近代科学的世界理解に対する批判として提出されているということである。道具的存在性に対する批判は通例の事物的存在の第一次性という観念への回帰を意味するものではなく、かえって自然からコスモスという性格を剝奪し、自然を*res extensa*へと還元していく近代科学と近代理性に対する批判を意味するものなのである。

こうしてみると、レーヴィットの世界概念は現在の英語圏の環境倫理学に言う「内在的価値intrinsic value」をめぐる議論と相通じるところが多いものであることが理解されるであろう。例えば、オニールは「内在的価値」に関して、①非道具的な価値、②他の存在に対する非関係的特性、③評価者の評価からの独立性（客観性）という三つの用法を整理し、②と③に関してはそれぞれ強い立場と弱い立場の二通りの解釈があることを示している⁴⁾。あるいは、テイラーの用語法に従うならば、ここで共通に問題なのは、「固有価値inherent worth」つまりそれ自身の善をもつ存在者に帰属される価値⁵⁾をもつものとしての自然なのである。それはまた、人間中心主義vs. 非人間中心主義の対立であると同時に、あえてアドルノの言葉を借用するならば、観光産業をはじめとする交換関係に組み込まれた物象化された自然経験の対象、つまり「自然の不在を証明するアリバイ」⁶⁾にすぎない自然に対する批判の意味合いをもつものだということもできるであろう。

われわれはここでレーヴィットの議論にこれ以上立入るつもりはない。本稿の目標は環境milieuがわれわれが生を営む上での媒体mediumであるといった立場に立って環境と行為との相関関係の再検討を行うことである。それはいま垣間見てきた道具的世界に対する“自然的世界”の独立性、さらにそうした世界の“自体存立性”といった主張を、实在論的枠組みをはずして積極的に勘案する試みでもある。その前提としてわれわれは二つの予備作業を行うことにする。まず、道具に対する一般通念が批判される必要がある。ここではカッシーラーの技術論の検討を通

じて道具的価値に環境世界の内で一定の位置が見出されることになる。第二に価値に関する問題である。あらかじめ議論を先取りして言うならば、価値が“第三性質”であるか否か、といった議論に関して言うならば、われわれは内在的価値を含め一切の価値が結局のところ間主観的であるとの立場に立って、問題設定そのものの再検討が不可欠であると考え。そうした中で、価値がわれわれの情動といかなる関係にあり、諸価値が互いにかような関係にあるものとして存立するか、とりわけ内在的価値と道具的価値はいかなる関係に立つのか、といった点についてより子細な議論が要求されることになる。続稿では、こうした点を最も徹底して問題にしたブレンターノ学派をはじめとする現象学周辺の価値論に関する学説史的な整理をもとに環境と共感、環境と身体といった問題に見通しを与える所存である⁽⁷⁾。こうした作業を踏まえて、環境をわれわれの行為が遂行される「場」として捉える視点が提示され、かくしてレーヴィットが提起した問題に対していわゆる環境倫理学とは異なった視角からの答えが用意されることになるはずである。

（目次）

序

第一章 技術と「間」 （以上、本紀要掲載分）

第二章 価値と環境

第一節 価値の位相

第二節 価値と共感

第三節 行為と「場」

結

第一章 技術と「間」

ハイデッガーは技術論を「技術の本質は決して技術的な事柄ではない」⁽⁸⁾ との一節から始めている。彼固有の立場はさて措くとして、この一文は諸学が対象化された限りでの技術を問うのに対し、哲学がこうした「技術的」説明がことごとく前提とする「技術の意味」そのものへと問いを向けねばならないことを端的に示唆するものといえよう。この問いはまた「技術の価値」や「技術の当為」を問題とする狭義の倫理的問いに対し、そうした問いの起源をなす根源的な経験へと向かおうとするものである。

ときに、われわれは技術と自然を区別し、それを対立的に理解することが多い。しかし、こうした対立は固定的なものであろうか。語源的なことを言うならば、ギリシャ語のテクネーに関しては「生む」「作り出す」という意味の $\tau \acute{\iota} \kappa \tau \omega$ や $\tau \epsilon \upsilon \chi \omega$ との類縁性が指摘され、 $\tau \epsilon \upsilon \chi \omega$ が $\tau \upsilon \gamma \chi \acute{\alpha} \upsilon \omega$ （生じる、出会う）と同根であることが示唆するように、テクネーは根

源的には主客未分化の相での「生む」＝「生まれる」という事態を指示するものと考えられる⁹⁾。この点でやはり「生む」「生まれる」を意味する $\phi\rho\omega$ を語源とするといわれるピュシスも同様なものと見なしうる。かつて三木清が「自然も形を作るものとして技術的である」¹⁰⁾と述べたように、もともと両者はともに「生成」に関わるのである。さらに、テクネーには作為者の意図が関与するとも言われるが、 $\alpha\iota\tau\acute{\iota}\alpha$ には「責めを負う」という意味はあっても、*causa*のように「惹き起こす」という意味はない。それゆえ、技術は直ちに意図的な加工として不作為としての自然と対立させられるのでもない。

技術に関する哲学的考察は、そもそもいかなる視座からいかなる語り口で問いを発するかということからして議論は錯綜し、確たる指針を見出し難い現況にあるように思われるわけだが、その際「技術的」説明を避けようとするならば、同時に技術と自然との対立も自明のものとして決めて掛かることは避けなければなるまい。本章ではこうした点を踏まえた古典的な議論として主にE. カッシーラーの「形式と技術」の検討を通じて、技術を独特の媒介形式として捉え、その成立を問う視点を確認する。それはまたハイデッガーとは別のルートから技術にアプローチする可能性を模索するものとなろう¹¹⁾。

1. カッシーラーと技術

まず、カッシーラーが発言した論争状況を簡単に確認しておくことにしよう。改めて言うまでもなく、熱機関の発明や化学工業の成立に代表されるように、前世紀において技術と自然科学との密な連携関係という新たな事態が生じる。それは職人的、手仕事の余韻を伴った従来の「テクネー」という技術の在り方を一変させ、体系化され科学化された技術知の形態である「テクノロジー」（技術 - 学）という新しい概念を生み出すことになった。こうした変貌は、大学という制度をはじめ産業的、日常的に再編成を喚起するとともに、技術が自然科学の「適用」であるとの思念を生じさせることになる。

この状況に対応した哲学的な省察として同時代のドイツ語圏に「技術哲学」と呼ばれる一群の議論が生じることになった。E. Kapp, L. Noiré, F. Dessauer, E. Zschimmer, M. Eyth, O. Spenglerらが主な論客である。その主流をなす考えは、技術とは「目的」や「理念」が素材的自然において実現する目的論的活動であるとするものである。このことは例えば、技術とは「人間の意欲に対し物体的形態を賦与する全てのもの」（Eyth）、「自然法則によって充足される理念の実現」（Dessauer）であるといった規定に端的に現れている¹²⁾。一般に、彼らは技術における「創造」や「発明」のはたらきを重視し、「理念」を見出す「知能」や「精神」といった契機に重きをおく。このことにより、技術を自然の加工という人間的活動として特色づけようとするものということができる。これとは反対に技術に「手段」としての性格を強調する見解も少なくない。例えば、ヤスパースは「技術の原理は、人間の定めた目的に奉仕するべく、物質や力

に加えられる合目的行為である」¹³とする立場を表明しているし、生の哲学のE. Sprangerは技術が目的に徹頭徹尾従属すると同時に目的から相対的に自立して存立するものとする。ちなみに後者による自立性の指摘は止目に値する。というのも、かりに技術をそのつどの目的—手段聯関に依拠して定義するにせよ、技術は当初の聯関を超え出てつねに新たな聯関に開けてゆく性格を有すると考えられるからである。（技術を「労働手段の体系」とする本邦の戦前の技術論論争で大勢を占めた立場もまた、こうした自立性の主張を一步進め、技術の本領を機械や道具といった客観的手段の側に見出そうとした典型と見なすことができよう。）どれほどの客観性ないしは自立性を技術に認めるかという点に関しては相違が見られるにせよ、これらの論者は技術を目的に対する「手段」や「道具」と理解する点では一致したものとみなしうる。

こうしてこれらの論調はそろって、技術が科学の適用であり自律的な発展をとする一般通念に対し、技術を人間の営みとの関係から理解しようとする。しかし、目的・手段のいずれの契機に力点をおくにせよ、ここでは〈目的を定め、そのための手段を獲得し、選択し、使用する人間〉という了解は既定の共通前提とされており、しかもそれらは往々にして自然—精神、客観—主観といった対立図式のもとで理解されている。したがって、こうした諸立場はハイデガーのいう「技術の道具的—人間学的な規定」¹⁴に他ならないということになる。カッシーラーもまた技術に対する反省的な視点を含んでいる限りでこれらの立場を評価する。但し、彼としてはそれらが依って立つ諸前提自体が吟味を要するという見地に立ち、「目的」や「手段」を第一義的とし、新しい新たな別の語り口を見出そうとすることになる。

まず、技術と科学における世界に対する関わり方の違いを糸口にすることにしよう。カッシーラーは科学の問いが「何であるか」という性格をもち、「現実的なもの」としての存在に向かうものだとする。これに対して、技術の問いは「何でありうるか」というものであり、それはつねに新たに形成されるべき「可能的もの」としての自然や現実に関わるものだとされる（FT, 81）。換言するならば、ギリシャ以来「学」が生成のうちに—なるもの、不変なるものとしての存在を探求してきたとするならば、テクネーはこれとは逆に存在を生成の相のもとに、つまり未来へと出で来らせる開かれた運動のもとに獲得することを追求するものなのである。したがって技術の哲学においては技術をこうした特有の態度において、つまり可能性の概念を中軸に据えた形で把握することが必要となるわけである。

ところで、科学が客観的「存在」を問うとしても、それは存在をAnsichseinとして扱うべきことを意味しない。ここで一般に、彼の批判哲学では客観的存在から根底にある客観化する作用に遡ること、つまり「存在」から「生成の過程」に立ち返り、存在を精神の「形態化作用」（FT, 51）の生成物として把握することが問題とされることを思い起こす必要がある。彼の「シンボル形式の哲学」では科学をはじめ言語や神話さらに芸術等をそれぞれの固有の「精神的形成作用」（P S F 3, 17）として把捉することが課題なのであり、それはまた「生産物から生産作用へ」

「forma formataからforma formansへ」(FT, 43)といったスローガンでいい表されたりもする。それゆえ、科学がこうした精神の自発的機能という意味で「生成」と捉えられるとするならば、技術もまた文字どおりの意味での「形づくり」のはたらきとして「生成」の原理として了解されるわけである。かくしてカッシーラーの技術の哲学は「シンボル形式の哲学」の構想の上に技術を固有の態度と法則性において規定する試みとして展開されることになる。

結論を先どりしていうならば、カッシーラーは技術を特有の媒介形式として捉え直そうと試みる。後に見るように、この見地のもとでは、技術が科学の適用であるか否か、技術において目的実現と手段性のいずれが基底的吗、といった問題設定はそもそも存在意義を失うことになる。付け加えていうならば、彼の議論は19世紀以後の近代テクノロジーというより道具を用いた技術的活動一般を扱ったものであるが、それはより根底的な次元として技術と生の関わりを主題化する必要があることに所以するものである。さらに、この時期のカッシーラーは精神の形成作用を問うに当たり、何らかの既存の理念的形式にしたがった分節化ではなく「形式の生成そのものの謎」(MN, 4)を主題とする構えをしており、この限りで彼の技術の哲学の課題は技術的能作が一つの意味聯関として生成・存立する機制を反省的に別決することにあつたと理解されうる。本章では以下、技術を精神や生との関わりにおいて位置づけ、その上で技術に特有の距離化の機制を探ることとする。

2. 技術と生

技術はしばしば自然と類比的でありかつ自然に対して超越的であるものと理解される。手を「道具の道具」とよんだアリストテレスをはじめ、道具を「器官投影」とするE. カップや「器官代償」とするゲーレンなど、この点は道具が身体器官とくに手の延長であり、身体の膨張であるとする見解に顕著に示されている。他方、近代の人間観に対する批判として、技術的製作に対して人間を「工作人」としての在り方に切り詰め、自然に対する「支配」の関係に立たせる契機として批判的な見方がなされることも多い。それはまた、プロメテウスが火を得て以来、a tool making animalたる人間の本性をなすものとみなされることもある。こうした相反する規定に対し、カッシーラーでは「精神」と「生」をめぐる懸案に絡めた処理をみており、このことを通じて技術と自然の「距離」と「対決」に関わる論点が提示されているように思われる。

技術を精神的形成作用とする上で重要と思われることは、第一にユクスキュールの環境世界論、とくに「機能環」の概念の摂取である。機能環とは、動物の知覚網における刺激の結合、その作用網への影響、この作用網から効果器への一定の運動様式の伝達といった閉じた連鎖のことをいう(MN, 43)。知覚網と作用網は一つのリズムの内に融合し、動物と環境世界はこうして閉じた合目的性を形成するものと理解される¹⁹⁾。だが、これとともに重要なのは、精神と生を「対立」関係として捉えるクラージェスや晩年のシェーラーとの対質である。例えば、クラージェスは精神を

生の運動に対する「抑圧者」ないし「対抗者」と位置づける見地に立って、「人間以外の生物がコスモス的な生命のリズムにおいて脈打っているのに対し、人間はこのリズムから離れ、精神の法則を持つ」¹⁶とする。これを受ける形でM. シューラーは——精神を実体化することを慎重に避けながらも——精神が衝動的な生を「指導し、先導する」独自の原理であり、生に対する「禁欲者」であるとする。彼の有名な「世界開放性」のテーゼは、精神がこうして世界を端的な相在として把握しかつ意味的に方向づける原理であるとする観点に基づいている¹⁷。周知のように、身心問題に関して両者はともに表現＝表情現象を見据えることにより、身・心を不可分の合一体として把握する議論に先鞭を付けた論者であるが、こうして彼らは「精神」をそうした身心不可分の「生」と根本的に対立する「否定的」な原理とみなす点で共通した見地をとるものである。

まず、精神と生に関わる一般的な問題としてカッシーラーの見地を見てみることにしよう。彼はとくにシューラーに対し、精神に着目することで有機的「生」の自己完結性に対して人間を開放的な存在として捉える視点を呈示したことを肯定的に評価する（vgl. MN, 60）。他方、この構制をとるならば身心問題に関するさまざまな難問が形を変えて出現することになることを指摘し、「もし生と精神が全く異なった世界に属しているならば、これらは一体どのようにして全く統一的な能作を遂行しうるのか」（GL, 250）との批判を投げかける¹⁸。カッシーラー本人としては精神を構成的な「形づくりGestalten」のはたらきとして捉え直す立場から、精神と生の関係を「相互嵌入」関係（MN, 39）として理解しようとする。即ち、一方で彼は人間学的・形而上学的視点から、精神を——動物における世界の没入的・直接的な「掴みGreifen」と対照させて——それを客観化して意味として「把捉」する媒介的機能として特徴づける。この見地は人間をanimal symbolicumとする彼の後の議論に連なるものであり、有機的生からの隔たりを人間の本源的宿命であるとするものである¹⁹。他方、精神的世界に内在する視点から、彼はクラークスらによって精神と生の「対立」と呼ばれたものが精神世界に内在する構造であり、精神それ自体に牽引力と斥力の「両極性が内在」（GL, 255）するものと理解する。つまり、いわゆる生は精神による形成物にほかならないのであって、精神はこの世界に没入的に関わるのが可能であると同時にそこからいったん身を引き剥がし、新たな介入を図ることも可能なのである。それゆえ精神は「それ自体でありながら、近さと遠さ、遠さと近さをつねに変動させる」（MN, 30）ものと考えられることになる。このようにカッシーラーは身心不可分の関係の内に精神と生に関わる問題を位置づけ直す。こうして「ロゴスの身体化」（PSF3, 129）に定位することにより、彼は精神を基本的に〈つくる〉機能と捉えながらも、それは「単なる世界の支配ではなく、世界の形成である」（MN, 27）と主張しうるわけである。

技術もまたこうした距離と対立を内蔵させた作用として、身体に密着した「手もと性」におけるあり方と同時に「自立的な意味と自律的な機能」（FT, 73）を備えたはたらきとして理解され

る必要があるのである。カッシーラにおいて技術はこうした「対象的領域」における形成作用（FT, 61）として、言語的—理論的思惟における「概念把握作用」（FT, 52）と類比的な捉えられ方をし、両者は世界を形成する作用として「根源的に一つのもの」（FT, 52）であるといわれる。具体的場面に立ち入るならば、まずここで問題となるのは「道具において客観への直接的捕獲（Ergreifen）に代わって媒介的関与が現れる」（MN, 40）という事態である。ここで技術がたんに「手」や「身体」との繋がりにおいてではなく、特有の「目」の機能ないし「眼差し方向」（FT, 62）によって特徴づけられることを注目に値する。技術はそれらが互いに融合した特有の「遠くをつかむ」（PSF3, 130）はたらきと理解されるからである。カッシーラは「道具の製作や使用において〈視るSicht〉ことの一定の形態と方向、つまり〈予見Voraus-Sicht〉という仕方が示される」（MN, 57）と主張する。つまり、この眼差しは技術においては現前性・状況性に癒合した直接的掴みから目標を「放置」（FT, 59）し、視線を「そらす（absehen）」（FT, 62）はたらきとして登場する。言い換えれば、それは空間的に「不在」で時間的に「未来」のものへと開けていく方向性（FT, 61）であり、これから実現に至るものとして目標を「予見」し、距離を孕んだ目標として「意図Ab-Sicht」を成り立たせるものなのである（FT, 62）。カッシーラは——ゲートに依りながら——一般に目について「〈感覚的に〉見ることはすべてすでに〈精神の眼で見る〉ことなのだ」（PSF3, 156）とし、知覚にすでにシンボリックの理念化のはたらきが介在することを明らかにする。これと同様に技術に構造的に内在化された眼差しもまた世界に特有の観点から意味を付与する理念的はたらきなのである。

かつてアリストテレスが技術を「ロゴスを伴った制作できるという状態（hexis）」²⁰と定義したことは有名である。カッシーラもまた技術を理念化を孕んだ眼差しのあり方と関係づけ、技術にpoiesisとともにnoesisが内蔵することを主張する。この限りで彼もまた技術を——言語やあるいは知覚と同様に——世界や事物に対する「ロゴスを伴った」身体的関わり方の一つとして理解するものとみなしてよい。つまり、こうした技術のロゴス性によってこそ、道具が一般にそのつどの状況のなかではじめて実際に「道具として」はたらくものであり、かつ現前的状況に直接依存しない「道具としての道具」という存立性をもつてありうるのである。そして、この距離化は同時に既成態となった形式を不断に超え出すような生成への飛躍を意味する。つまり、メルロ＝ポンティの『行動の構造』での言葉を借りるならば、「あらゆる環境の否定がそれを創造する能作の内にあらかじめ形成されている」のであり、人間は「すでに創造されてある古い構造を超出して別の〈構造〉を創造する能力である」²¹と考えられるからである。

3. 技術という“媒体”

前節では技術が距離と近さを併せ持つ作用であることを有機体的な生との対比を意識におきながら検討してきた。技術はこうした距離化を内在することによって「有機体的制限からの解放」²²

とでも特徴づけるべき事態をつねに孕むことになる。即ち、現前からの距離によってあたかも言語が擬声的表現から進んで特有の精神的形態を獲得するのと同様に、技術は身体と密着した単に単純な道具使用にとどまらず、「道具を作る道具」の制作であるとか、それに伴うより一般的でより複雑な道具への移行、あるいは「道具」からとりわけ動力機を備えた「機械」への質的転化、といったより込み入ったあり方への移行をつねに可能にしているのである。本節ではこの点を踏まえつつ「距離」と「対決」のあり方それ自体に幾分立ち入った検討を加える算段である。

ところで、第一節で見たように、技術はしばしば精神と自然との「橋」²³ わたしと捉えられがちである。しかし、精神と自然、内と外という境界は絶対的・固定的なものとは考えることは適当ではない。カッシーラーは「こうした態度の全体、また身体的ないし心的—精神的営為の全体において、まず〔主—客〕双方の知が現われ、それがはじめて自我の地平と現実性の地平に分かれる」（FT, 55）とする。即ち、この距離化は単なる距たりという以上に、技術というはたらきの〈内部〉で自我と現実の異質性が創出され、内から外へ、外から内へという二重の運動の中でそれぞれの輪郭が形作られるものとされるわけである。したがって技術は両項の〈間〉を行き来することによって新たな「形づくり」を達成する過程であるということになる。

こうした自我—世界の分立化は、まず、技術と呪術の対比によって示される。多くの神話的—宗教的世界において、火の使用からはじまって道具の製作、農耕や狩猟、癒し薬の知識や文字の発明に至るまで、こうした一切の営為が何らかの力の「権現」あるいはかかる力からの「賜物」として神話的力と関係づけられて理解されることは広く認められる（vgl. PSF2, 244）。だが、ここで問題なのは「呪術」による願望の成就と「技術」による解決との差異である。カッシーラーは「呪術的世界観の最初の段階では、単なる願望とそれが向けられている対象とのあいだには、明らかに感じとられるような緊張はほとんどない。ここでは、願望そのものにある直接的な力が内在している」（PSF2, 253）とする。つまり、「言葉の魔術」や「像の魔術」に見られるように、呪術では自我と世界との原初的な「同一化」が支配しており、願望に対して「観念の万能」（PSF2, 188）が信じられている、というわけである。これに対して、技術においては「内」なる世界と「外」なる世界の「境界設定」と「対決」が一つの要件とみなされる。この線引きによって規定的な役割をはたすと考えられるのは、「意のままにならない」という不能為（Nichtkönnen）、つまり「挫折」や「断念」の体験である。

カッシーラーはこの内と外の対立の機制を「抵抗（Widerstand）」体験を通じた「意志」の成立に絡めて次のように説明する²⁴。「意志にとって対象は意志に規定性や確定性を与える基準なり導きの糸なりであると同時に、意志の制限であり、それに対する反対物や抵抗なのである。この制限の力に即してはじめて意志の力が成長し、強固なものとなる。意志の実行はたんに自己自身の高揚によって成就するものではない。それは意志が自己に根源的に疎遠な秩序に介入し、この秩序それ自身を知り、そして認識することを要求する。こうした認識（Erkennen）はつねに

同時に一種の承認 (An-Erkennen) なのだ」 (FT, 59)。即ち、一方で〈制限〉や〈抵抗〉する力をなすものが根源的に〈疎遠なもの〉〈異質なもの〉として自己から線引きされ、自己とは独立に存するものとして「承認」される。彼は技術的能作が「覆いを剥ぐこと (Auf-Decken) として発見 (Ent-Decken) という性格をもつ」 (FT, 80/60) と繰り返して主張する。つまり、技術は——ドイツ語の「発明 Erfinden」の原義がそうであるように²⁵——「見出すこと」、以前には隠されていた自然を独自の必然的な連関において把握し、自らのものとするのが含まれているのである。そしてこれと反照的に、この〈異質なもの〉に立ち向かう「自我」が自発的な「能力」ないし〈意志〉するものとして立ち現れてくる。技術は外へと向かう運動であると同時に内へと遡及する方向を含んだはたらきであり、〈他なるものを介して自己を確証する〉運動である。あるいはそれは〈自発的な力〉とそれに〈疎遠な力〉という非対称性を創設する一種の「自己分裂」の運動であるということになる。いま、可能性という概念で事態を語るならば、それは一方では不能為に裏打ちされて能為・能力として意志する「われ」を定立し、いま一方で一定の「可塑性」を持った「客観的・可能的もの」 (FT, 60) として「現実」を定立する過程であるということができる。

したがって、こうした自我と世界との対立関係が成立することによって、道具がこの「対立」を調停するための「手段」ないし「媒介」として捉えられることになる。技術はこうした媒介者として三段論法における「媒概念 (terminus medius)」 (FT, 61) に準えられる。但し、技術は大前提と結論を結びつけるだけでなく、——三枝博音の言葉を借りれば²⁶——両者の隔たりを創り出す「過程」であるのだから、それは「間」という言い方をした方がふさわしいかもしれない。即ち、「道具」即ち「手段 (Mittel)」は「媒介 (Vermittlung)」であり、それゆえ語源的のみならず概念的にも「間 (Mitte)」の意味を包懐しているのである²⁷。そのつどの目的や目標、あるいは手段のあり方もまたこの〈間〉において形づくられる。いうなれば、技術はこのような媒体として世界を形づくるはたらきであり、同時にわれわれの世界との関わり方それ自身を形づくるものなのである。そして、このことは技術における「有機体的制限からの解放」に一つの見通しを与える。この意味で、前節であらかじめ触れておいたように、技術に限らず、精神的な形式はつねに新たに形づくるものと考えられる。それゆえ、技術の高度化とはこの〈間〉がさらに幾重にも構造化され、錯雑化することに他ならないのである。

さて、以上のことをもとに道具的存在の形成について検討することが可能になる。いままでの議論においては、技術が本来的に〈間〉という性格をすることは「自我」と「世界」ないし「現実」の〈間〉という意味でいわれてきたのであるが、カッシーラーの議論構制を考えた場合、ここに人と人の〈間〉という意味を読みとることも決して無理な話でないと思われる。即ち、脱一現前的な「予見」において媒概念として道具の存立が認められるわけだが、その際に道具はそのつど実際の意図のみならずさまざまな可能的な意図と関係づけられ、そうしたパースペクティ

ブの交叉の中で一定の区別性と持続性を持った何ものかとしての分節化を獲得すると考えられるからである（vgl. FT, 63）。したがって、こうした距離化という在り方は道具が歴史的＝文化的な意味空間の中に制度化され、具体的で間主観的に通用する形態を得るに至る経緯へと繋がる機制なのである。但し、道具が一種の「意味」的なものであるとはいえ、道具は目的－手段というイデアルな価値関係としてではなく、知覚的对象がそうであるように、何らかの「事物的なもの」「現実的なもの（das Wirkliche）」として分凝した在り方で、言い換えれば意味がmaterialなものに内在的に「受胎」した在り方で現出したものである。それは知覚における「シンボリック受胎」（PSF3, 235）と同様に考えることができよう。カッシーラーはまた、道具的世界では対象は「何ものかに対して（zu）規定されるという限りでのみ、何ものかとして（als）規定される」（FT, 64）という。即ち、道具はたんに斯く斯くの性質を備えた「事物」としてでなく、それとは異なった分節化、つまり他の存在にはたらきを及ぼす「活動性（Wirksamkeit）」（FT, 64）をもつものとしての特有の分節化を被ると考えられる。それはまた、他の活動性との差異を含んだ「ベクトル量の全体」（FT, 64）のうちに構造化され、形態を獲得する。

われわれは先に技術の態度が本質的契機として「何でありうるか」という可能性の概念を持つことに言及してきた。いま見てきたことを考慮するならば、この可能性の概念とはわれわれの歴史的＝精神的生の形成作用の根本様相であるということができるであろう。カッシーラーはこの概念が人間の意欲や行為に対す広大な「活動の余地」（FT, 67）を与えるものであるとする。つまり、それはヴァルデンフェルスのいう「行為の遊動空間（Spielraum）」²⁹を意味するものである。敷衍するというならば、技術に含まれる「抵抗」とは、何かを目指すという根源的な自発性に対する〈内側〉からなされる境界設定であり、いふなれば〈実在性の重み〉の告知である。ここでは実在性とは即ちそのつどの可能性の限界であり、不能為の別名であるが、そのことによって同時にまた「形成可能性」（FT, 60）なのである。「抵抗」という体験において精神の自己非完結性、つまり、精神が異なるものにおいて自己形成すると同時につねに異なるものに向けた開放性を持つことが根拠づけられている。それは現在という〈既定性〉に裏打ちされた来るべき未来への〈開放性〉である。他方、技術が対象的活動であるとはいえ、そこにおける〈間〉の成立に他者との共互的あるいは対抗的な関わり合いが抜き差し難く入り込んでいるとするならば、技術はすでに社会的・歴史的はたらきだということができるであろう。すると、道具に限らず意図や能為もまた同様に社会的なものとして理解されねばならないことになるであろう。それゆえ、技術が「形づくる」はたらきであるということは、とりもなおさずそれが歴史的生の生成の一つの相であるということの意味する。即ち、生がすでに形を帯びたものである以上、誤解を恐れずにいうならば、技術とは「形が自らを形づくる」ことなのである。

4. 小括

われわれは日頃道具を介して世界と関わり、この関わりの中で世界のうちに生を営んでいる。カッシーラーは技術の所在をこうしたわれわれと世界の〈間〉に見出す。即ち、技術の「精神」でも技術の「発展」でもなく、技術という「媒介」のあり方が問題なのである。われわれは彼の議論が身心二元論の手前でなされていることに改めて注意する必要がある。即ち、ここには当為と能為、自由意志と事体的身体の二元論的な截断は端から見出すことはできない。技術は可能性の概念と深く関わっているとはいえ、それはプラグマティックな意味でいわれる行為の「選択の幅」に還元されうるようなものではないのである。むしろ、こうした特有の可能性の概念にこそ実在性と一体となった技術という媒介形式の特質が存しているのである。

今日、テクノロジーは自律的発展の仮象をもってわれわれの前に現れ出てきている。この自律性はしばしば技術的合理性の名で呼ばれたりもする。しかし、かつてシュッツが社会的行為について述べたように⁸⁹、こうした「合理性」は外的観察者の視点からいわれるものであっても、技術を営む当事主体にとって必ずしも自明なものとはいえない。むしろこれに対して、カッシーラーの立場は技術のあり方がそのつどの「精神的な形式世界の全体」(FT, 77)に負っていることを対置するものである。それは技術の文化哲学であり、技術の存在様式に向けた問いだといえる。しかし、近代技術に対する応対としてはこのことのみでは無力なものに止まらざるをえまい。つまり、ここに世界との関わりが技術において不断に〈新たに形づくられるtransform〉ことが議論の前面に据えられる必要があるのである。われわれのみるところ、このことはテクノロジーが歴史的生の生成いかえれば「文化的再生産」の中でいかなる「戦略」として成り立っているかという問いの設定を要求するものである⁹⁰。それは技術の「政治学」として具体性において描き出される必要がある。つまり、「目的-手段」というカテゴリーにはそうした中で新たな位置づけが与えられる必要があるのである。

他方、カッシーラーが技術の所在を〈間〉に見出したことの意義は、技術が対象的世界の分節化に関わるはたらきであることを明らかにした点にも見出されてよい。技術は——ユクスキュールの閉じた機能環に対し——世界との開かれた関係性を示すものだからである。ちなみに、ここに言う世界への眼差し、つまり「客観的因果性」への統覚とは、狭義の事物的存在への眼差しに限られるものではなく、目的論的な世界観をはじめ、さまざまに意味に分節化された現実性を受け入れる余地を残すものである(vgl. MN, 73ff.)。それは、なるほど不可能性を端緒にしてはいるが、たんに「～しえないもの」として欠如的に証明されるだけの世界ではないのである。それゆえここで道具的媒体から一旦目をそらせて環境世界それ自体のあり方を考察し、そしてその上で環境世界を、一つには技術に限らず一般に行為を動機づける連関として、いま一つには行為の対象的契機として、われわれの行為との相関関係において捉え直す必要があると考えられる。

このことはまた「われ意志す」という意志する自我の成立機序についてのカッシーラーの見解に修正を迫ることになるかと思われる。いま、次章との関連で価値という点で言うならば、以上のことは道具価値・手段価値に先立つ第一次的価値を帯びた世界として環境世界を問題にすることであり、技術ないし行為という過程のうちに前者の価値を位置づけ直すことである。かくして、本章でみてきた〈間〉としての技術は、価値関係の解明を通して道具的世界としての本来の意義を明らかにされることになるであろう。（未完）

*カッシーラーの文献は記号により文中に表記した。

FT…Form und Technik, 1930, in : E. W. Orth, J. M. Krois (hg.), Symbol, Technik, Sprache, Felix Meiner (PhB.), 1985.

PSF…Philosophie der symbolischen Formen, Bd. 1–3, 1923–29, Darmstadt, 1982（訳文は木田元訳『シンボル形式の哲学』、岩波文庫を適宜参照した）

GL…“Geist” und “Leben” in der Philosophie der Gegenwart, in : Neue Rundschau, 32, 1930.

NM…J. M. Krois (hg.), Ernst Cassirer Nachgelassene Manuskripte und Texte, Bd. 1, Zur Metaphysik der symbolischen Formen, Felix Meiner, 1995.

注

- (1) Karl Löwith, Welt und Menschwelt, 1960, in: Karl Löwith Sämtliche Schriften Bd.1, 1981, Stuttgart, S.295（「世界と人間世界」『近世哲学の世界概念』佐藤昭雄訳、未来社、1973、41頁）。
- (2) ibid. S.307f.（前掲書、60頁以下）。この点については、異なった視点からではあるが、アドルノの「彼が望むように、存在が現存在に先行するものとして自立化されてのみ、現存在に存在を透視する力が与えられるのであるが、それにもかかわらず、ここでもまたこの力によってはじめて存在が露呈されると考えられる。…ハイデガーの還元計画にもかかわらず、存在の超越の理説によって、ほかならぬ基礎存在論の言葉が見捨てた主観性の存在論的優位が、またもやひそかに存在者のうちに持ちこまれることになった。」とする見解（『否定弁証法』木田元他訳、作品社、1996、145頁）をも参照。
- (3) Karl Löwith, Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen, 1928, Sämtliche Schriften Bd. 1, S.48.
- (4) J. O'Neill, Ecology, Policy and Politics, Routledge, 1993, pp. 8ff.
- (5) Paul Taylor, Respect for Nature, Princeton U. P., 1986, pp. 75.
- (6) アドルノ『美学』大久保健治訳、河出書房新社、1985、118頁。
- (7) この点に関して拙稿「十九世紀オーストリアの哲学的価値論」『社会思想史研究』第12号、1993年で試論したことがある。
- (8) Martin Heidegger, Die Technik und die Kehre, Neske, 1962, S. 5.
- (9) 梶形公也「「テクネー（τέχνη）」攷」『技術と倫理』日本倫理学会編、以文社、1985。
- (10) 三木清『構想力の論理』、『三木清全集』第八巻、岩波書店、1967、237頁。
- (11) カッシーラーとハイデッガーとの思想的対決については点は別の原稿で改めて論ずる所存である。とりあえずここでは、ダヴォスでのハイデッガーとの討論（1929, Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik, 1973, に付録として所収）の中でハイデッガーが「精神」に言及した箇所（同書262f.）

を併せ読む必要性を指摘するにとどめておく。

- (12) Max Eyth, *Lebendige Kräfte. Sieben Vorträge aus dem Gebiete der Technik*, 4. Aufl., Berlin 1924, S. 1f., Friedrich Dessauer, *Philosophie der Technik. Das Problem der Realisierung*, Bonn 1927, (永田広志訳『技術の哲学』科学主義工業社, 1941, 8頁)。技術哲学については, 拙稿「テクネー論論考」, 『科学史・科学哲学』第13号, 東京大学科学史科学哲学研究室, 1996を参照。
- (13) ヤスパース『現代の歴史と目標』重田英世訳, 理想社, 1964, 187頁。
- (14) Heidegger, *op. cit.*, S. 7.
- (15) 訳語に関しては, 山本義隆, 村岡到訳『認識問題 4』, みすず書房, 1996, 251頁以下を参照した。
- (16) L. Klages, *Vom kosmogonischen Eros*, München 1922, S. 45.
- (17) Max Scheler, *Gesammelte Werke*, Bd. 9, Bouvier, 1995, S. 10ff.。シェラーはさらに「精神」と「技能的知能」を峻別するが, この点についてはW. Cremer, *Person und Technik*, Idstein, 1991参照。
- (18) この点は本来アリストテレスの「能動理性」が抱える問題であろうが (vgl. GL, 251), ここでは深入りは避ける。
- (19) カッシーラーの人間学的・形而上学的視点と認識論的・内在的視点の二つの視点の交錯についての本人の弁明としてはMN65ff, 参照。
- (20) アリストテレス『ニコマコス倫理学』第6巻第4章 (岩波文庫版, 220頁)。
- (21) M. Merleau = Ponty, *La Structure du Comportement*, 1942 (1977), p. 189ff. (『行動の構造』, 滝浦静雄・木田元訳, みすず書房, 1964, 260頁以下)。
- (22) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, MEW. 23, S. 394.
- (23) 三枝博音「技術とはなにか」, 『三枝博音著作集』第八巻, 中央公論社, 1972, 441頁。
- (24) 抵抗概念については稿を改めて議論する所存であるが, ここではBurghart Schmidt, *Das Widerstandsargument in der Erkenntnistheorie*, Suhrkamp, 1985を挙げるにとどめておく。
- (25) 「新奇なものの発明」という意味での「発明」概念の近代性については, 中岡成文「発明される発明」, 中岡他編著『トランスモダンの作法』, リプロポート, 1992。
- (26) 三枝, 前掲書。
- (27) この点に関しては差し当たり, ヘーゲルの「目的は手段によって客観性と結合するのであり, この客観性の中で自分自身と結合する。手段 (Mittel) は推論の媒辞 [中間] (Mitte) である。」とする見解をも参照 (Hegel, *Wissenschaft der Logik II*, Werke in 20. Bände, Suhrkamp, 1969, S. 442)。
- (28) この点は言語における人称の分立化との平行性が意識されるべきであろう。忽那敬三, 熊野純彦「他我論の問題構制と〈象徴形式の哲学〉」, 『思想』698号, 1982, 8を参照。
- (29) B. ヴァルデンフェルス『行動の空間』新田義弘他訳, 白水社, 1987, 104頁。
- (30) Alfred Schutz, *The Problem of Rationality in the Social World*, 1942, in: *Collected Papers II*, Nijhoff (*Phaenomenologica* 15), 1976, pp. 64ff.
- (31) ここで念頭におかれているのは, 例えばブルデュの社会学的労作である。